見えない明日

ミャンマー
クーデターが壊したもの 4

出口が見えないクーデター後の国軍によるミャンマーの抑圧支配。国軍はなぜクーデターに踏み切ったのか、民主化への展望は、国際社会はどう関与していくべきか――。ミャンマー研究者2人に聞いた。

（連載は今回で終わります）

スーチー人気 見誤った軍トップ

京都大准教授

中西嘉宏さん

1977年生まれ。アジア経済研究所などを経て2013年から京都大学大学院准教授。著書に「ロヒンギャ危機　『民族浄化』の真相」など。

――国軍に反発する市民の一部と少数民族は国軍と武力闘争を続けています。

主に地方での紛争がおさまらず、選挙ができる状況ではありません。国際社会は、圧力をかける国々、関与を試みる国々にわかれ、効果的な対応ができていません。現状は国軍、抵抗勢力双方にとって行き詰まりです。

――欧米による経済制裁に効果は。

制裁の目的が暴力停止、民主化指導者アウンサンスーチー氏の解放、民主制への復帰などだとすると、効果は上がっていません。

――クーデター決行の理由は何だったのでしょう。

ミンアウンフライン最高司令官は2020年の総選挙で国軍系政党が勝つと信じていました。大統領になりたかったのだと思います。しかし、結果はスーチー氏率いる国民民主連盟（NLD）が圧勝。市民に影響力のあるスーチー氏の言動を国軍は警戒しており、短期的に見て解放はないでしょう。スーチー氏の処遇には、ミンアウンフライン氏の個人的な憎しみやねたみも感じます。

――日本政府にできることは何でしょうか。

国軍が国際社会の要求を無視し続けている以上、日本政府にできることは限られています。国際的な制裁の輪に加わることも選択肢ではありますが、効果が期待できないだけでなく、日本の影響力や国益を毀損（きそん）する可能性があります。

――混乱は続きますか。

ミンアウンフライン氏が現状を変えようとしない限り、誰も変えられません。両勢力が疲弊して戦闘を続ける気力を失うような状況にならなければ、停戦の機運は生まれないかもしれません。

（聞き手・ヤンゴン＝笠原真、福山亜希）